

資料紹介

東南アジアの生活時間に関する英文博士学位論文

中山 節子

筆者は、すでに、「育児支援・親教育支援に関する英文博士学位論文」の紹介を行った¹が、今回は研究の展開の必要からESCAP地域での生活時間調査に関する国際的先行研究の最新動向を把握するため、英文学位論文のレビューを行った。UMI (University Microfilms International) の英文学位論文からTime-use, ESCAPのキーワードの組み合わせで、2000年以降に限定して検索したところ、筆者の研究目的に関連あると思われる論文は、東南アジアに限定されて以下の2点あった。

一つは、米国アメリカ大学の経済学分野での博士論文であり、タイのインフォーマルセクターにおいて、同時並行の「ながら行動」による作業負担と、個々のウェルビーイングの関係の研究において、独自の生活時間調査をタイで行っているものである。

もう一方は、米国コロラド大学の同じく経済学分野の博士論文であり、RAND Labor and Populationが出している生活時間を含むミクロ統計を使用し、マレーシア、インドネシアを取り上げたものである。以下紹介する。

1. 作業強度と個々のウェルビーイング：タイの事実から (Work intensity and individual well-being: Evidence from Thailand by Anant Pichetpongsa, 185p., American University, 2004.)

このPichetpongsaの研究は、7章構成で、「1. 序章」、「2. 文献レビュー」、「3. 分析枠組み」、「4. 個人ウェルビーイング指標の構成方法と生活時間データ収集」、「5. 経験分析：タイの都市貧困層の家内生産ベース労働者のケース」、「6. 個人ウェルビーイングの経験分析」、「7. 演繹的推論と結論」、からなっている。

この研究は以下の3点に特徴があるといえる。まず、第1は、従来のウェルビーイングの計測で不可能であった個々のウェルビーイングを生活時間データによって測定するという試みである。第2は、この研究は、タイのインフォーマルセクター²で働く、家内生産ベースの労働者 (Home-based worker)³ が調査対象になっていること。第3に、インフォー

1 中山節子 (2004) 「育児支援・親教育支援に関する英文博士論文」『女性文化研究所紀要』No.31.

2 インフォーマルセクターの定義はILO Report of the Fifteenth International Conference of Labor Statistics (1993) での定義を使用している。

3 Home-based workerは自営労働者と契約による雇用労働者に2分されるとしている。

マルセクターでの生活時間調査に適した生活時間調査方法を考案したこと、である。

最初の一点目については、著者のPichetpongsaは、従来ウェルビーイングの測定として広く受け入れられているUNDPによって開発されたHDI (Human Development Index) は、その数式にGDPの値が強く反映されやすい結果になっており、偏りのある指標であると批判し、複数の仕事を同時並行的に「ながら行動」で行うことによる仕事の負担が、仕事の生産性、心身の健康など、個々のウェルビーイングに多様な影響を及ぼしているとしている。

特に女性は、掃除をする一方で、調理をし、同時に音楽を聴いたり、子どものことを考えるとといった複数の役割を担っており、時間貧困 (Time poverty) に陥っているとする。そのような時間貧困の中で、女性は沢山の仕事を「ながら行動」でこなさなければならない状況にある。このような状況は、個々のウェルビーイングに多大な影響を与えているが、生活の質と生活時間のパターンとの関係についての研究は、経済学ではあまり取り組まれていないと指摘している。筆者はまずこうした問題提起に共感を覚えた。

Pichetpongsaは、多くの先行研究を踏まえ、ウェルビーイングの測定は、福祉や社会経済的地位だけでなく、時間がどのように費やされたかを含めるべきであるとし、収入、教育レベル、仕事の負担のそれぞれの指標を作り、QOLをはかる数式を生み出している。

Pichetpongsaは、フェミニスト・エコノミストである主査のS.M.フローロらが作成した「作業強度の指標の種類」を、転載している (表1) が、それは「主な行動」と「二次的行動」の組み合わせが、A から G に分類されている。この分類は、「仕事／仕事でない行動 (work/non-work)」と「楽しい／嫌な (Pleasant/Unpleasant)」の組み合わせからなる。

表1 作業強度の指標の分類

	主な行動	二次的行動
A	嫌な仕事	嫌な仕事
B	嫌な仕事	楽しい仕事
C	楽しい・仕事でない行動	嫌な仕事
D	楽しい仕事	嫌な仕事
E	嫌な仕事	楽しい・仕事でない行動
F	楽しい仕事	楽しい・仕事でない行動
G	楽しい・仕事でない行動	楽しい・仕事でない行動

Pichetpongsa (2004 : 70) ; 原出所 : Floro and Hungerford (2001)⁴

4 2001年6月に開催されたレヴィ経済研究所会議「アメリカと他の発達した工業諸国のQOLに何が起きているか」へのS.M.フローロらのペーパーから転載の形をとっている。

ここで、「仕事」と「仕事でない行動」の定義は、フローロらによって次ようになされているとPichetpongsaは紹介している。「仕事とは、支払われる労働や代替可能な労働のことである。つまり、家事や育児も仕事に含まれる。仕事でない行動とは、代替不可能な行動のことである」。また、「嫌な仕事」の時間については、労働に関わる行動である「市場での労働時間、労働時間に伴う移動、通信、片付け、設備管理」とする。また、家事に関わる行動は、「この調査の目的により」「楽しい仕事」と「嫌な仕事」に分けている。楽しい仕事は「育児、調理、家の修理、ガーデニング」であり、「他の皿を洗う、洗濯、アイロン、家の掃除」などは「嫌な仕事」と分類している。ここでの「楽しい仕事」、「嫌な仕事」の定義は十分には説明されているとはいえないが、こうした着眼は注目に値する。

二点目については、バンコクの貧困ラインまたはそれ以下にある家内生産ベースのフォーマルセクターで働く労働者を調査対象者に選定している点が特徴である。1997年のアジア通貨危機時に、多くのフォーマルセクターの労働者が失業し、インフォーマルセクターがその受け皿になった。1999年タイ統計局が行った最初の「家内労働者統計」によると、インフォーマルセクターで働く労働者は、タイの労働人口の三分の二であるとされる。女性が多く、都市、農村問わず、様々な生産活動を行い、タイの経済を支えているが、いくつかのNGOの把握では、政府統計値の3倍のインフォーマル労働者がいるとされ、政府統計で把握されていない現実が述べられ、政府統計で見えにくい現実を小規模調査により明らかにしたいとの意図には頷けるものがある。

最後の三点目については、国際的な生活時間調査の歴史と生活時間の調査方法について先行研究をまとめている⁵。それらを踏まえ、この研究はバンコクにおける家内生産ベースの労働者の生活時間調査を実施するが、欧米の時間概念をベースにした調査はこの対象にそぐわないとする点が、筆者の研究にとって参考になる。インフォーマルセクターの労働従事者は、明確な時間が契約されていないため、生活時間の明確な測定はコスト上も極めて困難であるとPichetpongsaはいう。

続いて、インフォーマルセクターの家内生産ベースの労働者の特徴がまとめられている。以下、筆者の研究にとってもきわめて示唆に富んでいる点であるので全訳して示す。

1. 時間の概念について：家内生産ベースの労働者の時間の概念は、フォーマルセクターで働く労働者や先進国の人々の概念と異なる。この調査対象者は、時計や時間を基準に行動するより日常的に行っている仕事を元に行動している。例えば、「あなたは何時から働き始めましたか？」という問いに対して、フォーマルセクターで働く人であれば、8時半から、または9時からというように正確な時間で答えるであろう。対照

5 ここで抑えられている先行研究は国連統計部、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアなど、筆者が把握しているものの他、インドやフィリピンでの生活時間調査が行なわれた際の問題点など、新しいものもあった。インドやフィリピンでの生活時間調査は、いつ、どこが行なった調査か詳細は明らかでない。

的に、発展途上国のインフォーマルな家内生産ベースの労働者であれば、「子どもを学校へ送った後」や「朝食が済んだ後」または「朝の家事が済んだ後」というように答えるであろう。

2. 不平等な識字率：発展途上国では、識字率が低いのが通常であるため、調査対象者の識字に偏りがあることがある。そのため、日記式や思い起こしタイプの生活時間調査は上手くいかない。識字・非識字に関係なく生活時間データを取ることが可能な方法を考案した。
3. 柔軟な勤務日程：家内生産ベースの労働者は、フォーマルセクターの労働者のように明確な勤務時間があるわけではなく、やるべきことがあるときや新しい仕事があるときに働いている。そのため、週によって毎日働いている日もあれば、1、2週間何もしない時もある。
4. 柔軟な勤務パターン：家内生産ベースの労働者は、ペイドワークとアンペイドワークを組み合わせで仕事をしている。例えば、家内ベースの商店は客が来るのを待っている間に夕飯を作ることがあるだろう。生活時間のデータ収集方法はそのような「主な行動」と「ながら行動」を把握することが可能である。

(Pichetpongsa 2004 : 81-82)

これらを考慮し、Pichetpongsaは、この調査対象にふさわしい生活時間調査方法を考案している。その方法は、これまでの生活時間の調査方法で用いられてきた「日記式」と「回想方法」の組み合わせによるものである。まずインタビューは、調査対象者に調査について説明をし、時間の概念や生活時間行動について定義を説明し、調査対象者の理解を得る。調査対象者は簡単な日記式の生活時間調査を記入する。調査対象者が非識字であるかまたは、非常に多忙な時には、調査対象者の家族や親戚の観察によることを可とする方法をとっている。日記は、1時間おきに自分の行動について記録させる。忙しい時は2、3時間後に記録してもよいとした。また、時間を日記に自分で記入するため、回答者の負担感も減る。翌日インタビューが、簡単な回想のインタビューを行い、生活時間日記をより正確に完成させる。このような訪問式インタビューを複数回行う。

サンプリングは、タイ地元のHome Net⁶という家内生産ベースの労働者を支える団体に協力を依頼して、ランダムに選んだ170世帯のうち、110世帯である。調査対象者数は大規

6 HomeNetは、北部、東北、バンコクなどタイ全国17州の108のローカルメンバーシップからなる。HomeNet は国際的組織で、フィリピン、インドネシアなどにも支部がある。本部はタイバンコクである。HomeNet Thailand : 386/59 Soi Ratchadaphisek 42, Ratchadaphisek Road, Jatujak, Bangkok 10900, Thailand. (<http://www.homenetseasia.org/index.html>)

模ではないものの、インタビューが複数回訪問する負担を考えると、この調査は大掛かりなものであったと筆者には推測される。以下関連のある結果について述べておく。

表2は、一日の就業形態別平均生活時間を示している。

これによれば、38%の人が、「主な行動」で約9時間を労働市場時間に費やしており、さらに12%の人が「ながら行動」で行う労働市場時間を行っており、この場合、労働市場時間の合計は11時間近くになる。「主な行動」のみで、生活時間調査を行う場合、労働市場でテレビを見ている時間は加算されないため、この時間は、通常見えない数値となっている。家の仕事は、14%の人が約3時間半費やしている。家の仕事の内訳は、家事、育児、買い物となっている。家事について費やす時間は約2時間である。ここでの家事の分

表2 一日の就業形態別平均生活時間

(単位：分／1日)

Table 5.10: Average Time Allocation in All Activities, by Employment Type
(Minute per Day)

Primary Activities	Contracted ¹		Self-Employed ²		Total average ³ (min. per day)	Percentage Distribution
	Mean	% ⁴	Mean	%		
<u>Primary Work Activities</u>						
Labor Market Work ⁵	487.44	33.85	589.23	40.92	547.59	38.03
Household work						
Domestic ⁶	142.11	9.87	92.31	6.41	112.68	7.83
Childcare ⁷	64.11	4.45	45.53	3.16	53.14	3.69
Shopping ⁸	45.56	3.16	27.15	1.89	34.68	2.41
Sub-total	251.78	17.48	164.99	11.46	200.5	13.92
<u>Primary Non-Work Activities</u>						
Leisure Activities ⁹	154.55	10.73	159.38	11.07	157.41	10.93
Other Activities						
Personal care ¹⁰	142.67	9.91	139.15	9.66	140.59	9.76
Sleeping	403.56	28.03	387.25	26.89	393.91	27.35
Sub-total	546.23	48.67	526.40	36.56	534.50	37.12
Total	1440	100.00	1440	100.00	1440	100.00
<u>Overlapped Activities¹¹</u>						
<u>Overlapped Work Activities</u>						
Labor Market Work	34.44	5.68	93.23	18.07	69.18	12.08
Household work						
Domestic	78.89	13.01	81.92	15.88	80.68	14.09
Childcare	109.27	18.02	73.31	14.21	88.02	15.37
Shopping	9.33	1.54	6.92	1.34	7.91	1.38
Sub-total	197.49	32.56	162.15	31.43	176.61	30.84
<u>Overlapped Non-work Activities</u>						
Leisure Activities	349.33	57.60	256.35	49.69	294.39	51.41
Other Activities						
Personal care	25.22	4.16	37.54	7.28	32.5	5.68
Sleeping	0	0.00	0	0.00	0	0.00
Sub-total	25.22	4.16	4.15842	0.81	32.5	5.68
Total	606.48	100.00	515.888	100.00	572.68	100.00

出所：Pichetpongsa (2004: 116)

類は、調理、片付け、洗濯、アイロン、被服管理、家の掃除、他の家の仕事、住宅管理、家庭管理、家族の送り迎え、家事に関わる移動が含まれている。育児は、約1時間となっており、その内容は、身体的世話、子どものことを考える時間、病気や障がいをもった子の世話、しつけ、一緒に遊ぶ、育児に関わる移動が含まれている。買い物は約30分である。注目される点としては、31%の人が主な活動と同じ程度の時間を「ながら行動」として、家事に費やしていることである。この表から、主な仕事を行いながら、家事や育児をしている状況がわかる。また、レジャー行動については、「主な行動」でレジャーを行うより、「ながら行動」で行っている割合が高く、費やしている時間も長い結果となっている。レジャー行動は、読書やテレビを見る、ラジオを聴く、おしゃべりをするなど、「ながら行動」で行えるレジャーとなっている。レジャーは、「ながら行動」で行われていることが示される。

表3は、男女を比較した生活時間の結果である。調査対象者が、女性92人、男性18人の合計100人であるため、数値に偏りがある。表は、「主な行動」の数値、「ながら行動」の数値、「主な行動」と「ながら行動」の合計数値、時間調整した⁷「ながら行動」の数値、「主な行動」と時間調整した「ながら行動」の合計が男女別で示されている。

この表から、「主な行動」と時間調整後の「ながら行動」の数値は、労働市場は、女性575分、男性617分、家の仕事は、女性316分、男性149分、レジャー行動は、女性298分、男性335分、その他は、女性546分、男性571分となっており、家の仕事は女性がより長く、レジャー行動は男性がより長い時間を費やすというジェンダー差が明白である。

すべての「ながら行動」を主な時間の半分の比重として、システムティックに算出してしまうことが、個々人のウェルビーイングをより正確に示す指標となりえるのかなどの議論の余地は残るが、この研究は、統計で把握しにくい、インフォーマルセクターの家内労働者の金銭貧困⁸だけでなく、時間貧困、さらには独自のウェルビーイング指標により、その値の低さを明らかにし、政策提言へ繋げている点は、特徴であるといえる。

以上、この学位論文でPichetpongsaが行った生活時間調査の結果は、筆者が別稿でタイ政府統計局が行った2001年生活時間調査結果を分析する際に、参考になる点が多く含まれていたばかりでなく、インフォーマルセクターの多いアジア開発途上国一般の生活時間調査の実施と結果の読み取り、タイムユースリテラシーの考察に大きな示唆が得られるものであった。

7 「ながら行動」は、主な時間よりもかけるエネルギーが少ないことにより、「主な行動」の半分の比重として計算し、調整している。

8 原語は、Money-poorである。

表3 男女別家内労働者の生活時間比較

(単位: 分 / 1日)

Table 5.11: Comparison of Varied Measures of Time Use, by Female and Male Home-Based Workers (Minutes per Day)

Women					
Activities	Primary only	Overlapped Only	Primary and Overlapped ¹	Deflated Overlapped Only	Primary and Deflated Overlapped ²
Labor Market Work³	538.15	74.13	612.28	37.07	575.22
Household work³					
Domestic	122.93	89.68	212.61	44.84	167.77
Childcare	58.91	94.1	153.01	47.05	105.96
Shopping	37.88	8.91	46.79	4.46	42.34
Sub-total	219.73	192.68	412.41	96.35	316.07
Leisure Activities³	151.9	293.42	445.32	146.71	298.61
Other Activities³					
Personal care	139.02	32.94	171.96	16.47	155.49
Sleeping	391.2	0	391.2	0.00	391.20
Sub-total	530.22	32.94	563.16	16.47	546.89
Total	1440	593.17	2033.17	296.59	1736.58
Change			593.17		296.58
Men					
Activities	Primary only	Overlapped Only	Primary and Overlapped ¹	Deflated Overlapped Only	Primary and Deflated Overlapped ²
Labor Market Work³	596.83	43.89	639.72	21.945	617.78
Household work³					
Domestic	60.28	34.72	95	17.36	77.64
Childcare	23.61	56.94	80.55	28.47	52.08
Shopping	18.33	2.78	21.11	1.39	19.72
Sub-total	102.22	94.44	196.66	47.22	149.44
Leisure Activities³	185.56	299.33	484.89	149.665	335.23
Other Activities³					
Personal care	148.61	30.28	178.89	15.14	163.75
Sleeping	407.78	0	407.78	0	407.78
Sub-total	556.39	30.28	586.67	15.14	571.53
Total	1440	467.94	1907.94	233.97	1673.97
Change			467.94		233.97

Note:

1. This is the sum of time (in minutes) spent in each activity, whether primary or overlapped. Primary and overlapped activities are given equal weight.
2. In summing the total time spent in each activity, overlapped activities are given half (0.50) the weight of primary activities. This is based on the alternative assumption that individuals focus less energy and/or attention on those activities that are considered secondary and/or tertiary (overlapped).
3. See notes to this variable in Table 5.10

出所: Pichetpongsa (2004: 120-121)

2. 彼女はどこで時間を見つけるのか？東南アジア2カ国の女性と仕事についてのエッセイ (Where does she find the time? Essay on women and work in two southeast Asian countries by Julie H. Gallaway, 119p., Colorado State University, 2001.)

Gallawayの上記論文は、「第1章 序」,「第2章 産休, 労働参加と収入: マレーシアからの検証」,「第3章 働くべきか働かざるべきか: それが問題か? インドネシア都市部における既婚女性の労働参加の多項ロジットモデル」,「第4章 使い果たした時間: インドネシア都市部の女性の市場生産と家庭内生産に費やす時間のトレードオフ」, となっており, 異なる3つの研究が, 東南アジアの女性と仕事というテーマで繋がった論文集である。

この中で, 生活時間を使用した研究は, 最後の第4章で, 取り扱った生活時間調査は, 先に紹介したPichetpongsaが行ったタイ調査のような独自調査でなく, 既存のインドネシア女性の生活時間に関するミクロレベルのデータを使用している。

ミクロレベルデータの入手先は, RAND Labor and Population⁹である。RANDホームページによれば, RAND Labor and Populationは, 世帯とコミュニティについての調査The Family Life Surveys (以下FLSとする)を現地の研究所との協力で, マレーシア (1976-77, 1988-89), インドネシア (1993, 1997, 2000), グアテマラ (1995), バングラデッシュ (1996) で実施している。マレーシアのFamily Life Surveysでは, 家族構造, 出産, 経済状況, 教育, 移動, 移住とその他のトピックについて調査を行っている。インドネシアのFamily Life Surveysでは, 消費, 収入, 資産など経済的指標に関すること, 教育, 移住, 市場労働, 結婚, 出産, 避妊, 健康状態, 衛生, 医療保険, 同居/同居でない家族の関係, 意思決定, 家族員の移住, コミュニティーへの参加などの内容が盛り込まれている。

本論文において, Gallawayは, マレーシアの1988-89年に実施された2回目の調査と, インドネシアの1993年に実施された調査のミクロデータを使用している¹⁰。RANDホームページで確認したところ, マレーシア, インドネシアの両方に生活時間についての項目は含まれるとされているが, Gallawayは, 第4章で, インドネシアのFLSのみで, 生活時間について触れている。

9 RAND Corporationは, 市場調査, 社会福祉政策, 人口統計, 高齢者問題, 定年, 国際開発などをターゲットにし, 調査・研究を目的とした非営利の研究組織である。大学院プログラムも併設し, スタッフは, 経済学, 統計学, 社会学についての高度な専門知識を持つ約60人と全米の多くの協力大学から成り立っている。本部は, アメリカカリフォルニア州 (1776 Main Street Santa Monica, CA 90401-3208) であるが, ニューヨーク, ワシントン, ドイツ, オランダ, イギリス, カタールにも支部を持つ。 (<http://www.rand.org/labor/index.html> 2005年7月18日アクセス)

10 RANDのホームページに, マレーシアのミクロデータと報告書の入手方法は, National Archive of Computerized Data on Aging (NACDA) のウェブサイトからダウンロードするか, ハードコピーをRANDに申し込む方法の二つがあると記載されている。インドネシアのミクロデータについては, 登録を行うことで, 閲覧可能となる。本ミクロデータを使用して, 論文等を書いた場合は, RANDに連絡することなどの注意書きがある。

それによれば、Indonesian Family Life Survey for 1993 (IFLS) は、RAND Labor and Populationとインドネシア大学経済学部のLembaga Demografiの協力で行った調査で、調査対象者は、インドネシア全国27州のうち13州の7,200世帯にインタビューしたものであるとしている。Gallawayの研究では、そのうち15-49歳の都市部に住む既婚女性1,828人のサンプルを使用し、家庭内生産に携わった時間を調べている。

表4が、その結果を示すものである。

すなわち、夫妻の家事時間と市場労働時間が、学歴別（なし、小学校、中学校、高等学校、高等学校以上）、宗教別（イスラム、プロテスタント、カトリック、ヒンズー、仏教）、市場労働参加別（していない、妻のみ、夫のみ、両方）に示されている。また、妻の家事時間と市場労働時間は、さらに市場労働をしている／していない別に示されている。

この表についてのGallawayの見解は、市場労働に参加していない妻の家事時間は、妻の学歴が上がるほど、長くなるとしている。しかし、市場労働に参加している妻の家事時間については、学歴がもっとも低い層と、高い層が少なくなっている。この背景については、高学歴層が家事をする人を雇っている割合が高いことを示し、この調査世帯の5%が使用人を雇っているが、高学歴層はその割合が29%であることを指摘している。また、宗教については、ヒンズー家庭の家事時間が男女ともに少ないことが特徴としている。

この表についての説明が十分にされていないので、筆者が読み取れる範囲でさらに読み取っていく。表の数値についてだが、数値の単位は時間、括弧の中はパーセンテージを表している。また、時間の合計は24時間になっていない。この数値について、全体の平均時間なのか、行為者平均時間なのか、判断できない。この点について、記載がないため、時間の長さではなく、値として、性別、学歴、宗教、市場労働参加別にどのような差があるかを比較してみる。

その結果、家事時間と市場労働に参加している時間の合計労働時間は、妻については、学歴が、上がるほど少なくなっているが、夫については逆に学歴があがるほど長くなっているというジェンダー差が見られる。これは、夫の学歴が高くなるほど家事労働時間が長くなることが要因となっている。また宗教別でみると、合計労働時間は、ヒンズー教徒が夫妻ともに少ないという結果になっている。これは家事時間の短さにと関係があり、Gallawayが指摘したヒンズーの特徴につながる。両方とも市場労働に参加していない、または、妻のみが市場労働に参加している場合は、夫の家事時間がそれぞれ9.92時間、9.29時間になり、夫のみが市場労働している場合（3.44時間）または共働きの場合（3.82時間）と比べて約3倍の差がある。

性別、学歴、年齢などに加え、宗教という要因での生活時間の違いがあるインドネシアの特徴とマイクロデータによる分析という点においてGallawayの論文は参考になった。

なお、筆者は、RANDのホームページから、Indonesian Family Life Survey for 1993マイクロデータのアクセスのための登録を行い、Gallawayがこの研究で使用している調査の中の生活時間調査の部分を追跡した。生活時間に関する質問は、1. 過去7日間で収入労働に

表 4 学歴・宗教・労働市場参加別、生産活動における妻の平均及び標準時間

Table 4.7: Means and Standard Deviations of Wife's Hours in Productive Activities by Education Level, Religion and Labor Force Participation.
(N=1145 if NOT & N=750 if LFP)

	NOT [*] Wife's Home Hours	LFP Wife's Home Hours	LFP Wife's Market Hours	LFP Wife's Total Hours	Husb's Home Hours	Husb's Market Hours	Husb's Total Hours
Wife's Education							
None	31.93 (16.80)	17.61 (14.85)	46.75 (26.84)	64.36 (25.23)	3.58 (8.46)	43.00 (28.50)	46.58 (27.79)
Primary	37.55 (21.04)	20.98 (15.62)	44.90 (24.61)	65.88 (24.98)	4.11 (8.38)	47.03 (24.04)	51.14 (24.15)
Jr. High	37.31 (22.38)	22.13 (13.74)	46.43 (26.06)	68.55 (25.53)	3.88 (7.68)	47.46 (24.49)	51.34 (23.51)
Sr. High	40.17 (21.71)	20.59 (15.97)	38.68 (16.94)	59.22 (21.78)	3.96 (8.42)	45.98 (20.33)	49.94 (19.77)
Post-High	40.92 (27.03)	16.67 (14.85)	38.19 (17.22)	54.85 (19.74)	6.04 (11.21)	45.96 (18.31)	52.00 (20.21)
Religion							
Islam	38.05 (21.07)	20.91 (15.16)	43.02 (23.99)	63.93 (24.93)	4.31 (8.70)	45.94 (23.32)	50.25 (23.11)
Protestant	38.66 (22.67)	21.28 (17.06)	44.69 (18.76)	65.96 (21.93)	2.94 (5.61)	49.21 (24.72)	52.15 (24.70)
Catholic	38.26 (29.82)	20.04 (15.49)	42.29 (19.67)	62.33 (22.54)	4.17 (9.40)	48.41 (20.26)	52.58 (19.13)
Hinduism	27.21 (19.46)	9.91 (12.16)	48.69 (21.06)	58.59 (20.62)	1.00 (3.38)	47.12 (29.85)	48.12 (29.74)
Buddhism	34.96 (20.78)	18.82 (16.08)	45.65 (17.71)	64.47 (17.26)	2.95 (6.38)	57.72 (22.32)	60.67 (23.10)
Labor Force Participant(s)**							
Neither	34.37 (24.59)				9.92 (16.24)		
Wife only		16.92 (15.31)	48.25 (25.73)	65.18 (26.92)	9.29 (16.02)		
Husband only	38.03 (21.09)				3.44 (7.10)	50.28 (20.08)	53.72 (20.30)
Both		20.65 (15.33)	43.07 (23.06)	63.71 (24.14)	3.82 (7.32)	51.05 (19.82)	54.87 (20.30)
FULL SAMPLE	37.70 (21.45)	20.39 (15.34)	43.42 (23.27)	63.81 (24.32)	4.09 (8.43)	46.50 (23.59)	50.59 (23.38)

* Only Home Hours are given for women in NOT since Home Hours = Total Hours.

** Sample Sizes: Neither = 102; Wife Only = 51; Husband Only = 1043; Both = 699.

出所: Gallaway (2001: 100)

何時間従事したか？, 2. 過去7日で農業で何時間費やしたか？, 3. 過去7日で農業以外の仕事で何時間費やしたか？, 4. 過去7日で学業に何時間費やしたか？, 5. 過去7日で家事に何時間費やしたか？, の五つであった。

これより、生活時間の調査方法が、日記式のような複雑なものではなく、簡単な質問形式であることがわかった。

以上、東南アジアの英文博士論文の先行研究からは、対象地域はタイとインドネシア2カ国ではあったが、これまでの欧米を対象とした生活時間調査からとは異なる多くの示唆を受けた。

(なかやま せつこ 大学院生活機構研究科博士後期課程院生)